

旭川放水路(百間川)分流部

永忠堤の歴史と役割

歴史と役割

旭川放水路は「百間川」と呼ばれており、その分流部には百間川に洪水を適正に分派するための「一の荒手」「二の荒手」と呼ばれる荒手(越流堤)が設置されています。これらの仕組みは江戸時代に考案され、津田永忠の指揮により築造されました。

※越流堤：洪水調節のため、堤防の一部を低くした堤防



旭川放水路の津田永忠
礎を造った
(1680-1700)

津田永忠は、池田光政(二六〇九〜二六八二)、池田綱政(二六三八〜二七四〇)の二代の藩主に仕え、藩政の中核で活躍しました。永忠は藩の地方行政のトップともいえる「郡代(ぐんだい)」として、幸島新田、沖新田の干拓、百間川築堤、後楽園の造営、閉谷学校の整備から、藩政改革、財政再建とめざましい業績を遺しました。貞享三年(二六八六)から沖新田の開墾に先がけて、治水と新田開発の両立を目指して旭川放水路の整備にとりかかりました。岡山藩では承応三年(二五五四)の大洪水を受け、城下町への洪水の軽減をはかる放水の仕組みがありましたが、それを大きく改修しました。この改修によって、百間川の築堤、分流部における二つの荒手の整備(二までは二六八七年頃概成、河口部での大水尾(おおみお(遊水地))と水門群ができあがりました。江戸時代、数々の大工事に貢献した津田永忠は、没後三百年以上を経た今も人びとにその功績が語り継がれ、親しみを込めて「永忠(えいちゅう)さん」と呼ばれています。このたびの平成・令和の改築の完成後、永忠さんにちなみ、分流部の堤は「永忠堤」と呼ばれるようになりました。



分流部改築の概要

旭川放水路(百間川)は、江戸時代に造られた放水路を活用し、一九七〇年代より国によって河川改修を進め、令和元年(二〇一九)六月に完成しました。また分流部では、洪水を適正に旭川から分派するため、補強等を目的とした改築を行いました。

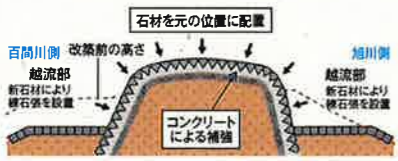
改築の内容

分流部の歴史的遺構の保全と、治水機能を継承する具体的な保全方法及び施設構造等について、有識者からの助言(百間川分流部保全方策検討委員会)をもとに決定。

一の荒手	巻石部(亀の甲)を一度解体した後、コンクリートで補強し、現状の石を用いて元の形状・積み方で復元。
二の荒手	低水路部の石張りを一度解体した後、補強し、現状の石を用いて元の形状で復元。高水敷部の石張りは現状保存、左岸導流堤は保全。(補強)
背割堤	背割堤をかさ上げし、暗渠・水制状石積みを土中に保存。



巻石部の改築イメージ



■練石積構造
洪水時に破壊されない様、既存の石材を使用しコンクリートによる練石積の構造に改築、外観は概ね元の位置に配置する様に仕上げました。



百間川分流部の改築にあたっては、歴史的遺構である「一の荒手」「二の荒手」などの保存・保全および分流部の周辺環境に配慮しています。

江戸時代に築造された百間川の役割は、現在も受け継がれています。

岡山城下は度々洪水に見舞われた

宇喜多秀家(一五七二〜一六五五)が、岡山城築城の際に堀への導水のほか、天然の堀として利用しよう旭川の流路を整備しました。岡山の城と城下町は、旭川に沿って形成されたため、洪水により度々大きな被害に見舞われていました。特に水衝部の石関町付近は出水の際、激流に見舞われ、城下が浸水することもあり、時として大きな被害も出ました。

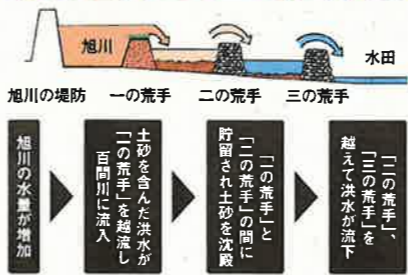
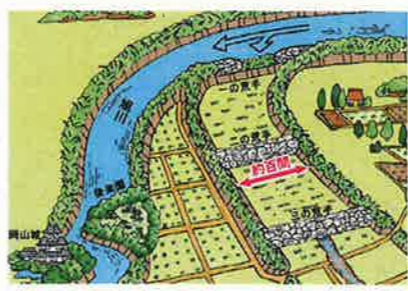


旭川の水が増すと百間川へ分流される仕組みづくり

貞享三年(二六八六)、堤や荒手(越流堤)を備えた放水路が築造され、一定量を超えた旭川の水が荒手を越えて百間川へ分流することで城下を洪水から守る仕組みを実現させました。

貞享の築造時の分流部周辺イメージ

※「百間川」とは、「二の荒手」の幅が百間(約180m)あることに由来。



※「三の荒手」は現存しません。

百間川の果たした役割

百間川は岡山城下の防災だけでなく、基幹的な排水施設として新田開発にも大きな役割を果たしました。この歴史的功績から、平成二七年「百間川の治水施設群」として土木学会選奨土木遺産に、令和元年には倉安川百間川かんがい排水施設群として世界かんがい施設遺産に登録されています。

